

## 『徒然草寿命院抄』の注釈研究

— 評言を中心に —

はじめに

近世には数多くの『徒然草』の注釈書が刊行されたが、その嚆矢は秦宗巴の編纂した『徒然草寿命院抄』<sup>1</sup>である。『寿命院抄』の注釈内容は、その後に刊行された林羅山『野槌』や松永貞徳『なぐさみ草』といった『徒然草』の注釈書へと受け継がれていく。その影響は現在まで続いており、『寿命院抄』で指摘された典故が現代の注釈書でも踏襲されるなど、注釈書としての水準の高さに対しても高い評価がなされている。

『寿命院抄』という注釈書の特徴としては、『徒然草』の最初に「序」を設けた点や、<sup>2</sup>前文に「條段ノ多少次第本ヲ以テ校合スルニ各々不同今善ナルニ随テ決シテ上百三十七段下百五段合シテ貳百四十二條敷<sup>3</sup>」とあるように、上巻一三七段・下巻一〇五段を各章段に一・二・三と数字を振って分ける形式を用いることで章段区分を明確にした点がこれまで注目されていた。しかしこれらの特徴以外にも『寿命院抄』以降の『徒然草』注釈書に先駆けて行った工夫として、一部の章段に

対して章段内容の解釈を含んだ評言を付した点が注目される。

『寿命院抄』に見られる評言について、小秋元段氏は「『徒然草寿命院抄』における草稿本と改稿本―鶴見大学図書館蔵本を手がかりに―」の中で「改稿本系では各章段の冒頭または末尾に宗巴の評言が多く加わる」と言及し、一〇五段に見られる評言を例として紹介している。そしてこれらの『寿命院抄』の評言について「宗巴の評言はこの「大意」の魁をなすものといつてよいだろう」と、各章段に対して解説を加えた注釈書として有名な『なぐさみ草』の先駆けになったとの評価を下している。<sup>4</sup>

このように『寿命院抄』の一部の章段には各章段の内容に関する評言が見られ、以降の注釈書に影響を与えた点が既に指摘されていた。<sup>5</sup>しかしこれらの『寿命院抄』に見られる評言が『徒然草』のいずれの章段に付されているかという基本的情報を網羅したものや、各評言の内容にどのような種類があるかという論考は見られない。そのため本稿では『寿命院抄』に見られる各章段の冒頭や末尾に記されている評言をリスト化し、それらの特徴について分類をすることで内容の整

久保田 一弘

理と考察を行う。これにより編纂者である宗巴がどのように『徒然草』を読んでいたのかという点を明らかにし、『徒然草』注釈史における『寿命院抄』の新たな位置付けを行うことを目指す。

### 一、『寿命院抄』に見られる章段解釈の評言

『寿命院抄』の注釈には各章段の解釈に関する評言が数多く見られる。本稿ではこれらの評言について「章段間の関連性が指摘された評言」・「章段内容の概略が中心に書かれた評言」・「章段内容の概略と影響が中心に書かれた評言」・「章段内容への評価が中心に書かれた評言」の四種類に分類した。なおこの内「章段間の関連性が指摘された評言」では近接章段および遠隔章段との関連性について数多くの注記が見られ、これらの注記はいずれも妥当性の高い内容となっており、また各章段の関連性を意識することで『徒然草』の読み方に対する理解が深まる内容であることを既に論じた。

そのため本稿では「章段間の関連性が指摘された評言」を除く、「章段内容の概略が中心に書かれた評言」・「章段内容の概略と影響が中心に書かれた評言」・「章段内容への評価が中心に書かれた評言」の三種類の章段解釈に関する評言を整理したものを末尾の表に挙げた。以下この表に基づきながら、三種類の章段解釈に関する評言の特徴についてそれぞれ考察する。

#### (1) 章段内容の概略が中心に書かれた評言

表1で示したように、『寿命院抄』では五七の章段で章段内容の概略が中心に書かれた評言が付けられている。これらの評言のうち表の「1-1、章段内容の概略が簡潔に書かれた評言」を見ると、二段では「此段人主タル人ニ儉約ノ道ヲス、ムル也」、六段では「此段子孫アリテ無益ト云事ヲ述タリ」、一五段では「此段羈旅ノ中ニテ人ノタシナミ心モチヲ書タリ」、四一段では「此段無常ヲス、ムル也」とあるように、多くの注釈で各章段の概要について簡潔に紹介する内容が書かれている。これらの章段内容の概略についての評言は、主に各章段の注記のはじめに記されている。このように各章段のはじめに読み取るべき主旨を簡潔に説明することで、章段理解の導入としての機能を果たしている。

これらの評言以外に表の「1-2、章段内容の詳細な解説や類例が書かれた評言」では、一五二段で「此段内府ノ静然上人ノ老体眉白ク腰カ、マリタレハ見ル所計ノタツトクミユルトハ老タル故也老タル物カタツトク見ルナラハ此ムク犬モ老タルトテ内府ヲ打テマイラセラレタリ(中略)此文段ノ心サヤウニミエタリ」と簡潔な章段内容の概略だけでは理解のしづらい部分を補うために、詳細に解説が付けられている。これと同様に一六九段では「此段ノ心ハ後嵯峨院ハ八十七代ノ時分マテ何事ノシキト云事ライハヌト云事ライハヌト云人アルライヤ其ヨリ六十年アマリ前二後鳥羽院御位ノ比世ノシキモカハリタル事ト

云タル事ニテアルト建礼門院ノ官女右京丈夫ト云人カユイモトヒタル也」と章段内容についての解説を記した後に、「人ノ云異説共ヲノヘタル段也」と概略が書かれている。同じく二二三段では「此段火ハチニ炭ヲ、キノルニ御前ニテハ手ニテサシノル事有識ノ通法也然ルヲ白キ物ヲキタル時相違ノ事ヲ意得サスル也」と詳細に章段内容についての解説が付けられている。このように『寿命院抄』では読み取るべき主旨が理解しづらい章段については、詳細な解説を付けることによつて各章段の理解を容易にするための工夫が施されている。

また一二段では「此段ヨキ友ノ内ニテ同シ心ナルト少シタカイタルトヲ評論スル也」と同じ考えの人と違う物の考え方をする人について論じられていると章段内容についての概略を示してから、「タトヘハヲナシ心ナルマメヤカナル心ノ友トハ孔子ト顔回トノ如キ是也」と類似の例として『論語』に見られる孔子と顔回の関係性が挙げられている。これと同様に四六段では「此段人ノ名物ノ名道理ヲ問テキハムヘキト也」と章段内容の概略を記してから、「今モ柳原室丁辺ニ腰ヌケ風呂トテアリ打聞タルハ風呂ノタ、ヌトイフ名ノヤウナレトモタツテキラレヌト云義也」と「腰ヌケ風呂」に関する命名の由来についての類似の例が紹介されている。また一六三段では「此段常ニ書字ノアヤマリヲ心ニカケサセン為ニ例トシテ一箇条ナレトモ挙タリ」と普段書く際に間違えやすい字として、「塩ノ字ノ類也」と類似の例が挙げられている。以上のように『徒然草』の各章段の注記に類似の例を引用

することは、これまで『野槌』に数多く見られる特徴として指摘されていた。<sup>7</sup>しかしここまで見てきたように、類似の例の引用は『寿命院抄』でも一二段・四六段・一六三段で見られる。今後は類似の例の引用について『野槌』独自の工夫としてではなく、『寿命院抄』からの影響を受けて付けられた注釈という視点から考察していく必要があるだろう。

以上のように「章段内容の概略が中心に書かれた評言」では、読み取るべき主旨が容易な章段では各章段のはじめで簡潔に説明し、読み取るべき主旨が難解な章段では詳細な解説を付けることで各章段の理解を容易にするための工夫が施されていた。また各章段の注記の中には章段内容に関連する話題が類似の例として引用されていた。

## (2) 章段内容の概略と影響が中心に書かれた評言

表2で示したように『寿命院抄』では、八つの章段で章段内容の概略と影響が中心に書かれた評言が付けられている。<sup>8</sup>これらの注釈内容を見ると、章段内容の概略と影響が中心に書かれた評言では主に『枕草子』と『源氏物語』からの影響について書かれている。三二段「此段ヤサシキ風情前段ニ同シ枕草子ヲ以テ書タリ」・四三段「此段又枕草子ノ面カケニテ書タリ」・一三三段「此段ニケナクミクルシキ事ヲアラハセリトリワケ老人ノ心モ多シ枕草子ニ此類多シ」とあり『枕草子』からの影響、一九段「此段枕草子源氏物語ナト所々ヲトリテ書タ

ル也」と一〇五段「源氏枕草子ノ面カケ誠作物語ノ筆法ノ眼目アラハレタリ」では『源氏物語』と『枕草子』の両書からの影響についての指摘が見られる。

なお一九段では「此段枕草子源氏物語ナト所々ヲトリテ書タル也」と『源氏物語』と『枕草子』からの影響について触れた後、「幻巻二別シテ十二箇月ノ哀ヲカ、サス書ノセタリ此段ニモ十二箇月ノ風景ヲ略シテ載タリ」と『源氏物語』幻巻との文章構成の共通性についての指摘が見られる。これと同様に三二段では「此段ヤサシキ風情前段ニ同シ枕草子ヲ以テ書タリ」と近接章段間の連続性と『枕草子』からの影響を指摘した後に、注釈内で『枕草子』の「ある所になにの君とかや言ひける人のもとに」の段が全文引用されている。このように『枕草子』の全文を引用することで、三二段との影響関係について理解しやすい形式が用いられている。そもそも『寿命院抄』の前文では「草子ノ大体ハ清少納言枕草子ヲ模シ多クハ源氏物語ノ詞ヲ用」とあり、『徒然草』の書式については『枕草子』の型を模していること、言葉遣いについては『源氏物語』からの影響が見られると評している。このように前文で書かれた『徒然草』の特徴についての指摘が、各章段の評言内で具体的な書名や該当部分を引用して説明されている。

このほかに九一段では「時日ノ吉凶無キ事ハ沈顔カ説ヨリ書タルナルヘシ」とあり、『古今事文類聚』前集・巻一二にある沈顔の「時日無吉凶辯」が引用されている。また一七九段では「此段遠禪師ノ頌ノ

心ヲ以テ書タル歟」とあり、「仏眼遠禪師頌」が引用されている。

以上のように「章段内容の概略と影響が中心に書かれた評言」に見られる引用の例からは宗巴が日本の古典は勿論のこと、それ以外にも漢籍や仏書にも目を配りながら注釈を積み重ねてきた学問的背景が伺える内容となっている。

### (3) 章段内容への評価が中心に書かれた評言

表3で示したように『寿命院抄』では、一六の章段で章段内容への評価が中心に書かれた評言が付けられている。これらの注釈内容を見ると、三一段では「此段カクレナシ」と評してから「カリソメノ一言モ尤可翫味也」と評しており、章段末尾の「今は亡き人なれば、かばかりのことも忘れがたし」とある部分に対して「玩味すべき内容だとの評価がなされている。また三九段では「此段カクレナシ」と評してから「但文外ニ幽微アルヘシ可翫味而已」とあり、章段内にある法然上人の教えに関して「玩味すべき内容だとの評価が見られる。このように章段内容への評価が中心に書かれた評言では、宗巴の志向性が伺える内容となっている。

また三五段では「此段カクレナシ」と評してから「今ノ世ニ多シ誰モ、可有受用事也」とあり、本文にある「手のわるき人の、はばからず文書き散らすはよし。見苦しとて人に書かするはうるさし」という章段内容から教訓性が読み取られている。これと同様に五七段では

「此段歌物語ノミニカキラス万ノ事ニワタルヘキ用心也」とあり、本文の「すべて、いとも知らぬ道の物語したる、かたはらいたく、聞きにくし」という内容から教訓性が読み取られている。また七一段では「此段カクレナシ誰カ心モカクアルヘキ物也」、一二六段では「此段万事ニワタルヘキ也陰極テ陽生火極テ以水ノ心也天地万物ノ道ニヒトシ」とあり、いずれも『徒然草』の各章段の内容から教訓性を読み取った評言が付けられている。

以上のように「章段内容への評価が中心に書かれた評言」では宗巴がどのような章段を評価していたのかという志向性や、どの章段からどのような教訓性を読み取っていたのかという形跡が伺える。

#### 終わりに

本稿では「章段内容の概略が中心に書かれた評言」・「章段内容の概略と影響が中心に書かれた評言」・「章段内容への評価が中心に書かれた評言」の三種の章段解釈について、各章段の冒頭や末尾に記されている評言をリスト化し、それらの特徴について分類をすることによって評言内容の整理と考察を行った。

この内「章段内容の概略が中心に書かれた評言」では、各章段のはじめに読み取るべき主旨を簡潔に説明することや詳細な解説を付けることで各章段の理解を容易にするための工夫が施されているほか、『野槌』に先駆けて類似の例についての引用が見られることを明らか

にした。次の「章段内容の概略と影響が中心に書かれた評言」では、前文で書名が挙げられている『源氏物語』や『枕草子』以外にも『古今事文類聚』等が引用されており、宗巴の学問的背景の一端を窺い知る内容であった。最後に「章段内容への評価が中心に書かれた評言」では、宗巴の各章段への志向性や、教訓性に基づいた読み方を行っていた形跡が見られた。

以上のように『寿命院抄』の評言を整理したことによって『野槌』に先駆けて類似の例が引用されている点や、『なぐさみ草』の各章段に大意を付けるという特徴の先駆けになっているという新たな特徴が明らかになった。このように『徒然草』の注釈書の嚆矢である『寿命院抄』は、評言で各章段の理解を容易にするための工夫を施すなど以降の注釈書に対して様々な影響を与えている。

表1 章段内容の概略が中心に書かれた評言

章段数	『寿命院抄』の注釈本文〈( )内は注釈項目〉
	1-1、章段内容の概略が簡潔に書かれた評言
2	此段人主タル人ニ儉約ノ道ヲス、ムル也
6	此段子孫アリテ無益ト云事ヲ述タリ
6	此段子孫ナカラン事ヲ願ホトニ也又下巻ノ五十四段ニ女トイフ物コソヲノコノモツマシキモノナレトアリ(女ナトイフモノナクテ)
15	此段羈旅ノ中ニテ人ノタシナミ心モチヲ書タリ
18	此段ヲノレカ身ニ花麗ヲセスシテオコリヲシリソケ儉約ニセヨト也
21	已上三段天地ノ風景ヲ述タリエンニヤサシキ類也
23	此段ハ前段ニハ上代ヲシタヒタル事ヲ述タリ爰ニテ又末ノ世トハイヘトモ禁中ノ義ヲホメテ書タリ
26	此段世ノウツリカハリ心ノ外ニナリ行事ノアハレヲノフル也前段ニ類スル也
37	以上三段男女トモニ心ツカヒアルヘキ事也
41	此段無常ヲス、ムル也
45	此段後人ノ怒ヲ制止スル也
49	此段無常ヲス、ムル也
58	此段遁世ヲス、メタル也
60	此段徳タケヌレハ行跡ニ許シアル義也
68	此段信仰ニ奇特アル事ヲ知ラシムル也土大根ヲサヘ信スレハカク奇特アリ況ヤ仏神ヲヤノ心也
70	是ノ義此段ノ眼目也用心諸芸ニワタルヘキ事也(チウヲサクラレケレハ)
73	此段世上ニ云イタス事ノ虚実ヲ分別シテ覚悟スヘキトノ義也
75	前段余論也静ニシテ性ヲ守事ヲ肝要トスル義也
80	此段ワルクトモ我カ道、ヲセヨト云義也
81	此段モテル調度マテ心ヲ付ル也前第十ノ段ニ大カタ家居ニコソコトサマハヲシハカルレトアル其類也
82	此段并下ノ段充滿ヲ慎タル義也歌器ノ教誡ヲ示スモノ也
84	此段又弘融僧都カ佳言ヲノフル事前段ニ同シ(法師ノヤウニモアラス)
88	此段愚癡ニシテセンカタナキヲ晞ル也
89	心ノトリ、ニ愚ナル事ヲ論シテ、前段ニ次第ル者也
93	此段人欲ニヲホハレテ自己ノ樂ヲワスレイタツラニ他ニ求ル事ヲアカス也段ノ内ニ問答ヲナス也
93	此段自他問答シテコトハル也(人イヨ、アサケル)
103	此段公明ノナソ、ヲ忠守腹立シテ座敷ノ無興ニ成テマカリ出タリ後來ノ覚悟トシテ書シルシタリ
104	此段スヘテ此人ノ物語ヲ書タル体也(アル人トフヲヒタマハントテ)
112	此段ヒトヘニ仏道ヲ修セン事ヲス、ムル也
115	此段又人ノ名ノメツラシキアリ
116	此段尤可甘心上ノ二段ニ名ノキコヘス事ヲ云テサテ名ヲ付ルニアリノマ、ヤスラカナルヲ付ヘシト云心也
125	此段少シ心得カタシタ、愚人ノ人ヲホムルニタトヘヲトル事ツタナキ事ヲ云歟
131	此段我カ分サイヲシラスシテ不叶コチ引ヲスル誤ヲ云ヘリ
135	此段才智ニホコリ人ヲアサムキアナツル事ヲ戒ル也
158	是ヨリ以下三段常ニ云事ノアヤマリヲタ、ス也

166	此段人間ノハカナキ喩也
167	此段家業ノ外我カ道ナラヌ事ヲ善悪ノトリサタセヌカヨキト云也
173	此段又異説有テ知カタキ事ヲ述ル也
186	已上二段ハ馬芸ニトツテ用心ヲ云也
207	此段モ上段ニ心通見怪不怪ノ類也
212	此段時節ノ相応ヲ感スヘキト也
214	此段楽ノ名目覚悟トシテアラハスモノ也 (廻忽モ)
215	此段并ニ下ノ段執権ノ人ナカラ質素ヲ用テ奢ヲ極メサルノ教戒也 (其世ニハカクコソ)
226	此段平家物語ノ作者ヲアラハセリ (サテ山門ノ事ヲ)
234	此段人ノツキアヒ世間常住ノタシナミヲ勸ル也
236	此段アマリニイラス所マテ氣ヲ付タテラスル教戒也
243	此段ハ経仏先後ノ法門ヲ沙汰スル也 (ハニナリシ年)
	1-2、章段内容の詳細な解説や類例が書かれた評言
12	此段ヨキ友ノ内ニテ同シ心ナルト少シタカイタルトヲ評論スル也タトヘハヲナシ心ナルマメヤカナル心ノ友トハ孔子ト顔回トノ如キ是也
25	此段イニシヘヲ考テ今ヲソシルナルヘシタトヘハ東国執権天下ヲ掌ニニキリ鎌倉ニ五山ヲ建テチカキ我カ子孫ノミ天下ノカタメト思ヒタルヲ云ナルヘシ
46	此段人ノ名物ノ名道理ヲ問テキハムヘキト也今モ柳原室丁辺ニ腰ヌケ風呂トテアリ打聞タルハ風呂ノタ、ストイフ名ノヤウナレトモツツテキラレスト云義也トリナシニ依テ聞アシキ名ヲ付ヘカラスト云段也
122	昔ハ詩歌管絃ノ道ニテ世ヲ、サメシ事モアリツレトモ幽玄トフカクカスカナル道ニテ今ノ世ニハ是ニテハヲサメラレスト云事也 (今ノ世ニハ)
152	此段内府ノ静然上人ノ老体眉白ク腰カ、マリタレハ見ル所計ノタツトクミユルトハ老タル故也老タル物カタツトク見ルナラハ此ムク犬モ老タルトテ内府ヲ打テマイラセラレタリ但静然上人ノ才智ノホト伝記ヲ未考サレトモ此文段ノ心サヤウニミエタリ (此気色ノタウトクミエ候トテ)
155	死期ノ来ル事由斷無シテ不慮ニ来ル心也結句ニ澳ノ干渴ヲトヘタル尤也 (ウシロニセマルトハ)
163	此段常ニ書字ノアヤマリヲ心ニカケサセン為ニ例トシテ一箇条ナレトモ拳タリ塩ノ字ノ類也俗字ノ例玉篇ノ初卷ニアマタ書ノセタリ常ニ覺カタシ俗字ノアヤマリ甚多可恥ノミ (太衝ノ大ノ字)
169	此段ノ心ハ後嵯峨院ハ八十七代ノ時分マテ何事ノシキト云事ヲイハヌト云事ヲイハヌト云人アルヲイヤ其ヨリ六十年アマリ前ニ後鳥羽院御位ノ比世ノシキモカハリタル事ト云タル事ニテアルト建礼門院ノ官女右京丈夫ト云人カユイモトヒタル也人ノ云異説共ヲノヘタル段也 (建礼門院)
213	此段火ハチニ炭ヲ、キソユルニ御前ニテハ手ニテサシソユル事有識ノ通法也然ルヲ白キ物ヲキタル時相違ノ事ヲ意得サスル也
238	此段ハ近友ト云モノ自讃七箇条アル也ソレハサセル事ナシ今兼好カ自讃ハヨキト云事ニハアラス近友カ自讃モサセル事ナキヲ七箇条ノコシヲケリ兼好モサセル事ナキニ自讃ヲ七箇条書ト云先例ヲトリテ書ト也

表2 主に章段内容の概略と影響が書かれた評言

19	此段枕草子源氏物語ナト所々ヲトリテ書タル也幻巻ニ別シテ十二箇月ノ哀ヲカ、サス書ノセタリ此段ニモ十二箇月ノ風景ヲ略シテ載タリ
32	此段ヤサシキ風情前段ニ同シ枕草子ヲ以テ書タリ
43	此段又枕草子ノ面カケニテ書タリ
91	サカヒトハ境界也此段仏法ヲシラ、シクアラハシタルモノ歟又時日ノ吉凶無キ事ハ沈顔カ説ヨリ書タルナルヘシ（無常変易ノサカヒ）
105	以上ノ二段ハ優ニヤサシキ者也源氏枕草子ノ面カケ誠作物語ノ筆法ノ眼目アラハレタリ大カタニ思テ心ヲ付サランハ兼好カ本意無念タルヘキ歟
113	此段ニケナクミクルシキ事ヲアラハセリトリワケ老人ノ心モ多シ枕草子ニ此類多シ
170	是モ用事ナクテ音信斗ノ文ハ時メキタルイソカハシキ所ヘハ可有斟酌事也清少納言枕草子ニサハカシウ時メキタル所ニウチフルメキタル人ノヲノカツレ、トイトマオホカルナラヒニ昔オホエテコトナルコトナキ歌ヨミテオコセタルスサマシトアリ此詞可了見互見者也（フミモ久シクキコエネハナト斗）
242	此段遠禪師ノ頌ノ心ヲ以テ書タル歟

表3 主に章段内容への評価が書かれた評言

31	此段カクレナシカリソメノ一言モ尤可翫味也
35	此段カクレナシ今ノ世ニ多シ誰モ、可有受用事也
39	此段カクレナシ但文外ニ幽微アルヘシ可翫味而已
44	此段又エンニヤサシキ風情上段ニ通ツル也
56	此段カクレナシ但此下ト此段ハ人前ニテ物カタリナトスヘキタシナミヲ書タリ
57	此段歌物語ノミニカキラス万ノ事ニワタルヘキ用心也
71	此段カクレナシ誰カ心モカクアルヘキ物也
76	此段カクレナシ前段ノ学問等ノ諸縁ヲサヘヤメヨト云ヲ殊更法師ノ上ニ引ウケテ次第シタル也
105	前段ニヒトシクエンニヤサシキ体也
126	此段万事ニワタルヘキ也陰極テ陽生火極テ以水ノ心也天地万物ノ道ニヒトシ
154	前段ノ余論ノヤウナル書出ナレトモ心ハ各別ノ義也翫味アルヘキ段也
211	此段尤可甘心事也
211	兼好カ心ハ是ナル時モ悦ヘカラサル也サレトモ人情ヲタスケテ是ナル時ハ悦ト書タル事面白シ（是ナル時ハヨロコビ）
225	此段白拍子根源ヲアラハセリ但シ平家物語ノ説トハ相違アリ何ノ道ニモ異説アルモノニヤ
235	此段心性ヲ論スル也尤眼ヲ付ヘキ也
237	此段ニ物ヲスルニタテサマヨコサマノ両説アル如ク其家々ノ相承アルヘキ歟



- 9 本論における『徒然草』の引用は、安良岡康作ほか『新編日本古典文
- 8 高木浩明氏「中院通勝真筆本『つれく私抄』——本文と校異」(新典社、二〇一二年)の巻末にある「引用書目索引」には一七八の書名が挙げられており、『寿命院抄』が様々な書物からの引用を行っていたことがわかる。本稿では評言部分で作品名が書かれたものを、影響が指摘されている作品として扱った。
- 7 前掲の島内裕子氏「『徒然草古注釈書の方法』『徒然草寿命院抄』から『野槌』へ」では『野槌』の特徴について「出典・典拠についても漢籍から詳しく引用している」点と「注釈を付ける際に、直接の原典のみならず、同内容の類似例を多数挙げている」という二点を挙げている。
- 6 拙稿「秦宗巴『徒然草寿命院抄』の注釈姿勢——章段間の関連性について」(『日本文学文化』一九九号、二〇二〇年・二月)
- 5 島内裕子氏「『徒然草古注釈書の方法』『徒然草寿命院抄』から『野槌』へ」(『放送大学研究年報』一八巻、二〇〇一年・三月)にも同様に『寿命院抄』の一部の章段に評言が見られることが紹介されている。
- 4 小秋元段氏「『徒然草寿命院抄』における草稿本と改稿本——鶴見大学図書館蔵本を手がかりに——」(『文学・語学』二一七号、二〇一六年一月)。
- 3 本論での『寿命院抄』の引用は、国文学研究資料館蔵『徒然草寿命院抄』(書誌ID20015457)に拠り、適宜吉澤貞人『徒然草古注釈集成』(一九九六年・勉誠社)を参照した。以下の『寿命院抄』の引用はこれに準じる。
- 2 小秋元段氏「『徒然草寿命院抄』と『本草序例』注釈——序段を中心に——」(関西軍記物語研究会編『軍記物語の窓』第二集、二〇〇二年・和泉書院)では、「序文」の問題について詳細な論が見られる。
- 1 注 『徒然草寿命院抄』には内題が見られず、また外題も統一されていない。そのため本論では統一書名である『徒然草寿命院抄』を用い、以下『寿命院抄』と省略する。また章段数については序段と二四三の章段に分けられている現行の章段区分を用いた。

学全集44 方丈記 徒然草 正方眼蔵随聞記 歎異抄』(一九九五年・小学館)による。

キーワード

『徒然草寿命院抄』・秦宗巴・評言・『徒然草』・『徒然草』注釈書